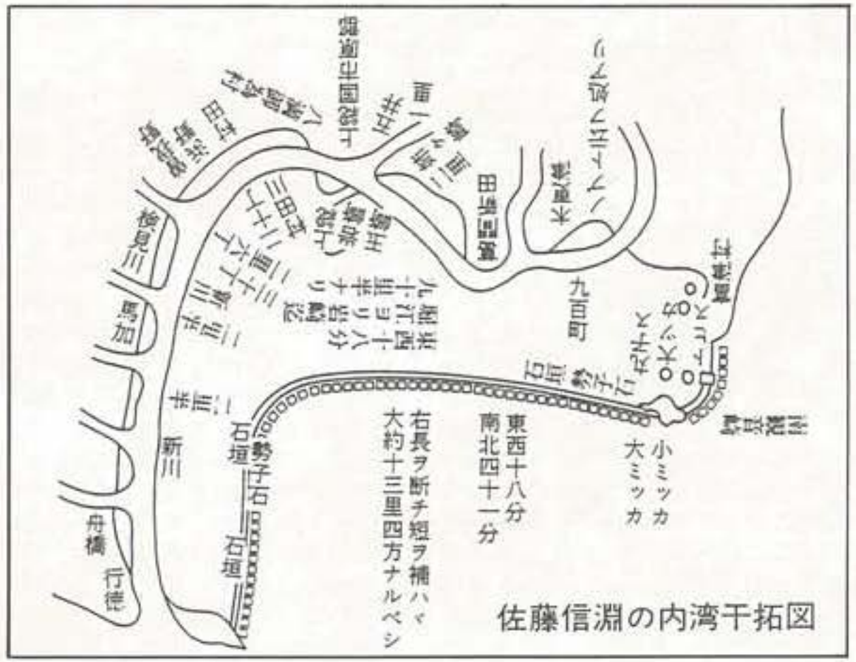
# 市川のまち 地名の由来

No.35




## まさに〝昭和の国生み〟

### 行徳地域の新町名(2)

行徳町、南行徳町との合併で東京湾に出ることができた市川市は、この行徳の海浜を埋め立てて、港湾の建設と工場地域の造成を目指しました。

東京湾の埋め立て事業は、明治・大正時代にも東京、横浜などで港湾拡張のために部分的に行われていました。昭和になると東京港の建設、京浜工業地帯の用地造成などで埋め立ての規模も拡大されていきました。さらに、太平洋戦争中には、東京湾臨海工業地帯造成計画が立てられ、京浜運河の拡幅延長、川崎市と千葉市の地先に大規模な埋め立て事業が行われました。

このように、東京湾の埋め立ては近代に入ってからのことですが、既に江戸時代に佐藤信淵（のぶひろ）が計画していたということが、彼の著書「内洋経緯記（ないようけいいき）」によって知られています。信淵は、東京湾のような遠浅な海の埋め立てには、潮の干満を利用した「勢子石（せこいし）の法」を用いればよいと考えました。これは、潮の引いた時にその波打ち際に杭を打ち、枝木を結びつけておくと、潮がさして砂を堆積し堤防のような状態になるので、そこに石を並べ堤防を強固にする。そして、印旛沼干拓で掘削予定の水路から出る土や河川の浚渫（しゅんせつ）による土砂などを使って埋め立てれば造作なくできるというものです。

遠浅な東京湾の海浜埋め立ては、このように古くから考えられてきたのですが、実際に大規模な埋め立てが始まったのは戦後のことになります。即ち、行徳海岸の埋め立て事業は、昭和三十四年から実施されました。工事の方法は、信淵の「勢子石の法」とは異なり、遠浅な海浜を利用して、船の航路にあたる部分から浚渫船がサンドパイプを通して、海水と一緒に泥砂を矢板（やいた）で囲った埋め立て区域に送り込む工法がとられました。これは、航路と埋め立て地が一挙にできあがる、港湾の埋め立てには最も得策な方法でした。

そして、昭和三十七年に高谷地先に高谷新町、三十八年には二俣地先に二俣新町、四十一年に千鳥町、四十三年に高浜町、四十八年に塩浜一～四丁目、五十一年に東浜と、新しい土地が誕生していき、鉄鋼業、金属製品、石油製品、化学製品、電気機械器具、化学工業、運輸倉庫などの大手企業を誘致して、その工場や倉庫が建設されました。まさに、「昭和の国生み」が実現したわけです。

次回は「市川の地名・最終回」を予定しています。

（社会教育指導員　綿貫喜郎）